



TITLE:

工場から企業へ - 堀江先生の晩年のお仕事 -

AUTHOR(S):

下谷, 政弘

CITATION:

下谷, 政弘. 工場から企業へ - 堀江先生の晩年のお仕事 -. 経済論叢 1982, 129(3): 233-240

ISSUE DATE:

1982-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/133912>

RIGHT:

經濟論叢

第129卷 第3号

哀 辭

故堀江英一名譽教授遺影および略歴

高年労働者対策に関する一考察……………	前 川 嘉 一	1
ファッション戦略, 組織間関係, 組織行動 および企業業績……………	赤 岡 功	15
ペルー海岸部アシエンダの近代化について…………	竹 内 勉	40
交換性回復と先物為替市場介入……………	羽 鳥 敬 彦	59
関一と大阪市営事業……………	関 野 満 夫	77

追 憶 文

堀江英一先生の人柄と学問……………	後 藤 靖	97
工場から企業へ——堀江先生の晩年のお仕事…	下 谷 政 弘	103

昭和57年 3 月

京都大學經濟學會

工場から企業へ——堀江先生の晩年のお仕事——

下 谷 政 弘

I

西賀茂のお宅をいつお訪ねしても、奥の方から「オウッ!!」と威勢のよい声はね返ってくる。電話をかけると、これまた「モシモシ!!」と威勢のよい声で応じられる。そういう威勢のよさで、何か常に私共に対し喝を入れると同時に、御自身に対しても生活のリズムを保たれようとしていた堀江先生。

1981年11月3日の朝、堀江英一先生はついに68年の生涯を終えられた。そして、その翌々5日の午後、いまにも小雨の降り出しそうな肌寒い洛北のお宅にて葬儀がとり行われた。モーツァルトのレクイエムがひそやかに流れていく。献花の順を待つ多くの人々。その中で、突然にあの懐しい先生のお声が甦った。それは、決して威勢のよいものではなかったものの、生前のお声をしのぶべく回わされた短かい録音テープであって、ほとんど瞬間的に洛北の静寂の中へと消え入ってしまった。

堀江先生から学恩を受けた私共にとって、その恩師の他界はほとんど堪え難い衝撃であった。しかし、とりわけ、一年間にわたる入院生活の間中も、最後のお仕事の完成に向けて体力をふりしぼっておられた先生のことを思い出すにつけ、しかも結局はそれが未完のままに終わってしまったざるを得なかった先生の無念さを察するにつけ、何とも言いようのない感慨にとらわれる。葬儀の際に流された録音テープこそは、先生が病床にあってなおも執念のごとく完成を目指されていた最後のお仕事のための口述筆記用のものの一部であった。

最後の病床にあってまで仕事を続けられた人は他にも多くおられよう。殊更に堀江先生に限ったことではない。ただ、多くの人々の場合、これまで手掛けてきた仕事をますます洗練化し収斂していかれたのに対して、堀江先生の場合は、のちに述べるように、最後まで新しいお仕事の完成に挑戦しておられたことである。病床へお見舞に上がった時も、御気分のよい時はこれからの研究計画をさえ、私共に話された。先生のこれまで

のお仕事の「遍歴」ぶりについては『堀江英一著作集』（全四巻、青木書店）その他に詳しいからここで重複する必要はない。ただ、それぞれの遍歴において赫々たる業績を残されたこと、および、その遍歴が何度かの研究対象・研究方法の大胆な「転換」によってはっきりと彩られて来たことは誰しも認められるであろう。先生は、一つの仕事から新しい仕事へ転換される時には理論的反省をこめてかなり明確なけじめをつけられていた。私共は、この「けじめ」の重要性について何度聞かされたことであろうか。先生は、常に、古い殻をぬぎ捨てるかのように前へ前へと進まれ続けた。

II

先生が最晩年のお仕事として取り上げられたのは現代独占資本主義分析であった。このお仕事については『著作集』には含まれておらず、先生御自身の著作もまだ比較的数量なく、また多分に試行錯誤的であり、ここ20年近く地道に暖め続けてきた構想をこれからようやく本格的にまとめ上げようとしていた矢先のことだけに、十人分に知られることも少ないままできた。そこで、以下、先生の最晩年のお仕事の内容について簡単にふれさせていただきたい。もち論、私が先生のもとで研究を開始したのは1970年からのことにすぎないから、以下の内容は全くの限定付きのものである。

ところで、幕末・明治維新論、市民革命論、そして『産業資本主義の構造理論』という一連のお仕事から、最後の現代独占資本主義へと研究対象を「転換」された時、その転換は先生にとっても最も大きなそれであつたろうと思われる。それは単に対象の転換にとどまらなかった。『著作集』第四巻の解説で、そのことを坂本和一氏は次のように表現しておられる。「堀江氏にとって『構造理論』からの「別離」とは……〔これまでの〕骨組や方法・視点の放棄ということではなく、もっとその底にある経済学者として一個の「現実」研究をつくり上げるに際しての研究姿勢にかかわる問題である。すなわち、堀江氏はマルクスやレーニンの古典の精緻な解釈の上に立って『構造理論』をつくり上げられたが、この中で実はマルクスやレーニンと自分との決定的な違い、すなわちマルクスやレーニンにはかれらが生活し実感した「現実」が研究対象となっており、かれらの研究はこの「現実」の分析からはじまっているが、『構造理論』を書いた自分はその結果を解釈しただけであり、自分にはマルクスやレーニンがもっていたような研究対象としての「現実」も「現実」の分析もないという違いに気づかれ、もし自分が本

当に現代独占資本主義という「現実」を研究しようとするならばマルクスやレーニンと同じように現代の「現実」そのものから出発しなければならないと考えられて、マルクス主義の古典の解釈を通じて現代独占資本主義に近づこうとする研究姿勢と訣別されたのである。すなわち、眼前の「現実」をもとにして、先生なりの「独占資本論」を書き上げるということ、これこそが堀江先生の晩年の最大目標に掲げられたのである。名城大学の学生向け『学部スタッフ自己紹介（1980年）』の中で先生は次のように語る。「そのうちに、わたしは自分の歴史学に疑問をもちだした。わたしのそれまでの研究は、現代社会の出発点——いわゆる初期資本主義に集中していたが、それはそのまま現代社会につながるものではない。……歴史学のアキレス腱は現代認識であるが、わたしはそのアキレス腱を欠いていたことを遅まきながら漸く悟った。こうした意識が『産業資本主義の構造理論』の執筆過程でうまれてきた。……わたしは現場を足と目と耳で知ろうと計画した。そして昭和38年の1ヶ月のヨーロッパ留学中にロンドンで、現代に研究を絞りそこから過去の歴史を回顧する決心をした」。こうした考えから、堀江先生の旺盛な工場見学の行脚が始められたのである。幸い、日本は「高度成長」を遂げつつあり、好個の「現実モデル」として存在していた。「堀江英一略年譜」（『著作集』）によれば、独占分析のために工場見学を開始されたのは1959年の尼崎製鉄所・戸畑製鉄所・田川炭坑の見学からであるという。それ以来、まさしく数え切れぬくらいの工場見学が行われたのであって、かかる「現実」から種々の資料を集めて来て、それをこつこつと整理し一つの理論を構築するという作業はほとんど亡くなられる寸前まで続けられたと言てよい。

現代資本主義における「現実」をもとにして独占資本論を構築するというこのような研究姿勢は、考えてみれば至極当り前のことではないか、と言われる人もあろう。しかし、現実には、それは全く道先案内のない旅に出たようなものであった。「古典」の解釈による独占資本論は既にいくつかあったが、それらが研究会で取り上げられる時も、自分たちの仮説との距離を計るためのものであって、決して道先案内ではなかった。実際、先生は日頃、私共に対してもあれこれの文献を読み、とは言われず、それより自ら現場へ出掛けていくことの重要性を説かれた。先生は現実の労働現場を理解するため各産業の生産プロセスを実地に勉強したり、あるいは企業の有価証券報告書を読みこなせるように会計の高校用教科書を何度も繰り返し読まれたり、それでも不可解な所があれ

ば企業や専門家の所へ何度も出向いて体得されようと努力された。「わたしは全くの素人です……」と頭をかきかき挨拶されながら、旺盛な好奇心のかたまりとなって体当りされていった。こうして、敢えて苦難の途へと先生は分け入ったのである。そして、それは著名な歴史学者から一介の研究者としての再出発の途であった。

III

さて、10年間暖め続けられてきた構想は70年代初頭から「巨大企業の生産構造」(1. 序説, 2. 結合企業の重層性, 3. 産業コンツェルン, 4. 協力会社)と題されて『経済論叢』に連載され始めた(1970-1973年)。そのほか単発論文としての「工場」(同誌, 1975年), また編著『イギリス工場制度の成立』(ミネルヴァ, 1971年)があり, また名城大学へ移ってからの「繊維工場の構造分析」, 「繊維企業の類型分析(1), (2)」(1979年)などがある。ここでは、それぞれの内容について立ちいる必要も余裕もないが、その全体の進展については概括的に整理しておきたい。先生の晩年のお仕事の二つの特徴をあげるとすれば、それは、[1] 独占分析への企業論的認識の導入, および [2] その企業論の構造的(重層的)分析方法, であった。私にはそう思える。

まず、前者について述べれば、先生の基本姿勢は「独占」を語るには何よりもその「主体」たる巨大企業の実態を知らずには一歩も進めない、という確固たる信念にもとづいたものであった。したがって、先生の独占資本主義分析は、実際は、現代巨大企業論であったと言えなくもなく、現代巨大企業の内部構造分析によってその支配力(生産力基盤)あるいは限界を明らかにしようとしたのである。この点は、従来の独占分析が一般的に市場(産業)論的接近から市場占拠率やカルテル論など市場構造との関連で理解されてきたのに対して、先生の場合、巨大企業の内部構造を析出することで、現代資本主義が成り立つ物質的・生産力的基盤を明らかにすることによってその実態に迫ろうとする全く異質な視角であったと言わねばならない。このような研究方法は、ある意味では、先生が独占資本主義分析に研究対象を転換する以前からの研究手法を一貫して踏襲したものであったとも言えよう。すなわち、いうまでもなく、この視角はすぐれて歴史的なものであり、現代資本主義は19世紀資本主義、さらにはレーニン段階の古典的帝国主義とも異なっていることを積極的に物語ろうとしたものであった。また、かかる視角は企業の内部構造の実態を無視した各種の産業分析、あるいは J. S. Bain 流の産業

組織論の枠組み、すなわち企業を「点」としてしかとらえない理論・実証への批判をなしていたことにも注目すべきである。

それでは、後者の、企業の内部構造分析はどのようなものであったろうか。それは、「企業」を「工場（プラント）—事業所—企業」というそれぞれ後者が前者を構成要素として包含するという重層的構造物としてとらえる仕方で行われた。ここに、先生自身が書かれた「研究進展の歴史」と題した小さなメモがある。それはマトリックスの体をなしており、横軸に「事業所レベル—企業レベル—企業集団レベル」という展開レベルが、そして縦軸に「生産構造—販売構造—組織構造—資金構造」という研究順序が記されている。そして、それぞれの交点にそこで検討されるべき諸課題が丹念な字体で書き込まれている。先生は「企業」を分析する場合、まずこのように、それを次元の異なるものに分解（論理的に区別）した上で、その相互関連に気を配りながら積み上げようと目論まれたのであり、それをよく「システム」という言葉で表現されていた。このシステム思考は、もち論、「分析と総合」というマルクスの方法論を先生なりに言い換えたものであったが、前述のように、先生の独占資本主義分析がまずもって工場見学から開始されたこと、すなわち上述のマトリックスでいえば「事業所×生産構造」という片隅の交点から徐々に展開され始めた経緯を反映して試行錯誤的に生み出された独得の方法でもあった。しかしまた、反面、収集された膨大・複雑な「現実」をどのように整理するか、すなわち、どのような説明の仕方こそ他者にとって最も説得的でありうるか、という先生の日常的研究姿勢の中から作り出されたものでもあったと言えよう。こうして、先生の企業構造分析は「企業」の内容を論理レベルで峻別して、工場から企業へ（さらに企業集団へ）と重層的構造物として表現されようとしたのであり、これはまさしく「企業」を立体的存在物として表現する方法であって、従来のような企業構造認識の欠落した、あるいは単なる意思決定過程の場としか考えない、すなわち概して企業を「点」としかとらえようとしないう平板な理論・実証への批判の意味がこめられていた。

IV

以上のような独得の方法論からいくつかの論点が生み出された。ここでは、その代表的なものを三つほど挙げてみよう。

一つは、現代資本主義とそれ以前との「生産単位」の内容の歴史比較である。すなわ

ち、現代巨大企業の生産構造を特徴づけるものは、19世紀資本主義の生産単位たる「工場」が単に規模の面で拡大したものではなく、それら「工場」を構成要素として包含する「工場結合体」、すなわち多数の異種工場を有機的に結合して成り立つ新たな段階の「生産単位」＝「コンビナート」であるとした点である。コンビナートは多数の異種工場を垂直的あるいは多角的に結合することによって現代における一つの「生産単位」を表現しており、これこそ現代独占資本主義の物質的基盤に他ならぬとしたこと。さらに、現代巨大企業はこの「生産単位」を複数、擁しており、それらは水平的にあるいは分業編成をなして存在していること。

二つには、巨大企業を中核とする企業集団の研究から考え出された「産業コンツェルン」概念である。「産業コンツェルン」とは相互の生産結合を基底においた（換言すれば、一つの「産業」の枠内で成立する）企業集団のことであり、これはいわゆる「六大企業集団」あるいは戦前「財閥」などの「総合コンツェルン」（先生はこれを「金融コンツェルン」と命名した）の構成要素であるとして、これまで概して並列的に混同されてきた両者を重層的に把握したこと。したがって、先の「工場―事業所―企業」という重層的把握は、同様に、さらに「企業―産業コンツェルン―金融コンツェルン」という、より上位のものへも援用しうること。

三つには、一つの産業内における「大手企業」と中小企業との格差は、単に規模の差にとどまらず、全く企業構造的に類型の異なるものであるとして、従来の産業論に「企業類型」概念を導入したこと、などなど。

以上の諸論点は、いずれも膨大な「現実」の整理の中から抽出されたものであって、それぞれ緻密周到な実証を伴って説明された。しかし何よりも特徴的なのは、以上のように、一つの構造を重層的に把握せんとするシステム思考であり、そこには「現実」をいかにわかりやすく説明すべきかという先生独得の論理操作が貫かれていたと言うべきである。時折、堀江先生は歴史家なのか理論家なのか、ということが話題になったりする。私にはわからない。単に理論だけを組み立てることを潔しとせず、まさしく地道に現場を走り回って「事実」を集め徹頭徹尾「事実」を以って語らせる、かと思えば、反面、理論先行的と思えるほどに大胆な割り切り方をする。決してどちらかだけの人ではなかったし、そもそも堀江先生にとっては、かかる問いかけこそ愚かであつたろう。ただ、堀江先生は随分と几張面な人であつたろうことは間違いない。その几張面さが、一

つのことを発言するのに慎重かつ綿密な調査研究を人一倍必要とさせたのであろうし、だからこそ、逆に、これと思ひ込んだら自信をもって頑固一徹、決して自説を譲らなかったのである。また反面、その几張面さのゆえに、自説を如何に説得的に他者へ伝えるかについて常に腐心されていたように思われる。先生は几張面で潔癖なお人柄であった。が、また同時に非常に気さくで、面識・場所を問わず誰とでもザックバランな雰囲気の中にとけ込んでおしゃべりする能力をもった人でもあった。夏の水泳とテレビの「捕物帳」以外に、さして趣味らしきものをもたれなかった先生にとって、実際、そのおしゃべり好きは、潤達さおよび縦横無尽さにおいて「趣味」の新しい範疇に属すべき域に達したものであったといえよう。尤も、私共は、ザックバランなおしゃべりの中に感じられる先生独得の現実感覚の尖鋭さによって、あるいは、急にまぎれ込んでくる「お説教」によって、たびたびザックバランな気分を破られたが。

V

さて、先生の「独占資本論」に向けてのお仕事は、このようにして工場見学から始まり、先のマトリックスに沿って次第に「企業」論にまで展開してきた。いわば、工場レベルから企業レベル（あるいは「本社」レベル）までの展開を見た。しかし、全く残念なことに、そのお仕事は二つの意味で遂に未完のままで終ってしまったのである。一つは、窮極の「独占資本論」へ行きつく前に「企業論」としての完成に思わぬエネルギーが割かれざるを得なかったこと、したがって先生は「独占資本論」としての完成よりも、むしろ「企業論」の完成に向けて最後の力を注がれるように変更せざるを得なかったこと。二つには、しかしその「企業論」も先の第三の論点たる「企業類型論」が（繊維工業の実証分析を除いて）成稿を見ることなく終ってしまったこと。とくに、この「企業類型論」においてこそ「企業」と「産業」（あるいは「市場」）との関連が重要テーマになって、いよいよ「企業論」から「独占資本論」への理論的関連が検討され始めると期待され得たから尚更であった。最も重要な論点があとに残された。

そして、他ならぬ葬儀の日に流された録音テープこそ、その「企業類型論」序論に向けて最後の努力を注がれようとしたものだったのである（この短かいテープは『名城商学』第31巻第3・4合併号にそのまま掲載される予定である）。先生の「企業類型論」は未完であるから私に論評の手掛りはない。ただ、先生がテープに口述される際に用いら

れたメモがあるので、その主要構成部分だけでも抄記しておこう。

第1章 序論——企業類型論

I 事業所—企業—産業

- (1) 事業所（購買・製造・販売）
- (2) 企業
- (3) 産業

II 構造とは？

- (1) 組織・構造・機構の意味
- (2) system の科学（技術・理論）方法—
分析と総合

III 事業所レベル

- (1) 製造企業の経営過程
購買過程—生産過程—販売過程
- (2) 機械体系、装置体系
- (3) 単純工場、複合工場
- (4) 統合工場、総合工場

IV 企業レベル——主として企業類型論

- (1) 生産過程
- (2) 単純企業
単一工場企業、複数工場企業
- (3) 統合企業
A 繊維企業を例として
B 鉄鋼業を例として
C 多角化企業
- (4) 購買事業所—製造事業所—営業所の
関係

V 産業レベル

企業レベルと産業レベル
との関連——

VI 総括

- (1) 総括 とくに企業類型を中心にして
- (2) 企業類型と企業の発展形態

こうして先生は、結局、「現実」そのものをもとにして「独占資本論」を書き上げるという大きな夢を果たされないまま逝ってしまわれた。今となっては、せめて「企業類型論」なりとも完成させてあげたかったと思うのは私共のグチであろうか。実際、先生は最後まで病床に本を積み、さらに、あれこれの本を私共に取り寄せるよう注文された。最後のお仕事は結局、以上のように成稿に至らなかったとしても、最後まで新たなお仕事の完成に向けて情熱を傾けることができたのは、先生の偉大さであったとともに、また、常々「働かざる者は喰うべからず」を終生のモットーとしておられた先生にとってお幸せであったのではなかったか、と思うばかりである。

今、堀江英一先生は、永年の旅荷をようやくおろし、洛北の山麓、霊源寺の墓所にて、丁度、比叡山と向き合って眠っておられる。生前、よくされていたように、「フー、ヤレヤレ」と大きなため息をついておられるかも知れない。そんな先生の墓前に立つたに、私共はただ、感謝の念と、そして、「先生、本当に永い旅路、お疲れさまでした」と申し上げる以外に言葉を知らない。